

ひばりクリニック、うりずんでの五日間を終えて

自治医科大学初期研修医 五十嵐 丈之

2019年12月16日～21日、訪問診療同行研修にエントリーして研修させていただきました。

研修内容は、外来見学(医師3名を見学)、訪問診療同行研修(在宅導入、定期フォロー)、往診同行(看取り、打撲)、在宅ミーティング(クリニック4カ所合同)、在宅医療利用者様のための各種会議同席(担当者会議など)、うりずん実習(一時支援、移動支援、児童発達支援)、一時保護所巡回同行、タイミングに恵まれ栃木医療センターでの家庭医レクチャーにも参加し、多彩な経験をすることができました。

外来では複数の医師の診察や、同じ医師が同一疾患を複数人診察する場面に立ち会うことができたので診察毎の着眼点も多様でした。診察のアルゴリズムや介入のタイミングの参考となる web サイトを共有して頂いたり、診療所セッティングで common disease の診断や critical な疾患の除外のために必要な身体診察法を感度/特異度を踏まえてフィードバックをいただきました。

違う診察場面では、認知症やインフルエンザ、突発性発疹と診断書を書く/書かないことで、利用者が辿る先の道が僅かに異なってくることに気が配られている事にも気がつきました。診断名というラベルとそれに社会が一連の反応を示すといった、繋がりを意識した視点からの対応の仕方も学びました。

セルフメンテナンスで長い付き合いの外来では、冗談を言いながら時に真面目にアドバイスする姿も拝見しました。ですがどの利用者様も医師と距離が縮まる(信頼関係が深まる)きっかけがどこかであり、一朝一夕で真似できないような背景があることを知りました。

在宅同行では、末期癌患者の在宅導入の場面に紹介状をいただく場面から同席させていただきました。大きく二つ、病院から在宅への移行は情報が円滑に流れるように退院支援センターにお願いすること、在宅を予め選択肢の一つに想定して治療の提案を行うことが患者・家族が落ち着いて自宅で過ごすためには必要だと感じました。また、重症心身障害の方のご自宅への訪問診療は利用者の本来の日常・家族関係などを浮き上がらせてくれました。ご家庭で児がニコニコ笑っている姿はとても素敵です。

また、子どもを取り巻く環境・社会制度を、生々しく体験しました。うりずん実習は利用者様と楽しく遊ぶことに専念しました。その翌日は利用者のお母様のご懐妊で主介護者の状態が不安定になった場合の対策をねる会議に同席しました。資源調整や、日中2人だけの時に何かあったら誰が対応するか、どうしてもできる隙間時間を埋めるためには、参加者がお互いをカバーし、子育てを応援する姿勢が大切でした。また、そんな状況でうりずんの預かり支援はどれだけ心強い存在だろうか、と介護者の視点から感じました。翌日は、一時保護所巡回で入所者の方々を診察しました。子どもを初見でちょっと変わっているなと思えたのは、やたら距離を詰め寄ってくる子だけ。その他の子は、ちょっと暗いけどこんな子いるよね、という印象でした。つまり、わたしはこれまで、そのような方と関わったとしても、家庭背景を無視して診療していたようです。親と子の関係は、親が受けた子育ての影響が大きく関わっているため、子どもにも親にも気づいて、できる事をして差し上げることが虐待の防止につながる。そういう意識を持って今後、人と接したいです。紙面の都合ここまでですが、A4 1枚に収まらない研修内容でした。

ひばりクリニック、うりずん、在宅チームの方々、利用者様、ご家族の皆様、研修させていただきありがとうございました。私自身は「子どもは大人を見て育つ、自分たちの住む地域を自分たちで作る」を軸の一つにして医師として活動しようと考えています。何処か皆様の近くで肩を並べて働けるように成長していきたいと思います。素敵な仲間がこのクリニック、うりずんに集まりますように。(2019.12.24)